

現代社会に潜むデジタルの「影」を追う

市民のための「サイバーリテラシー」

矢野 直明 サイバーリテラシー研究所 代表

No.136 ケータイ30年

スマホが唯一の情報端末になりつつある

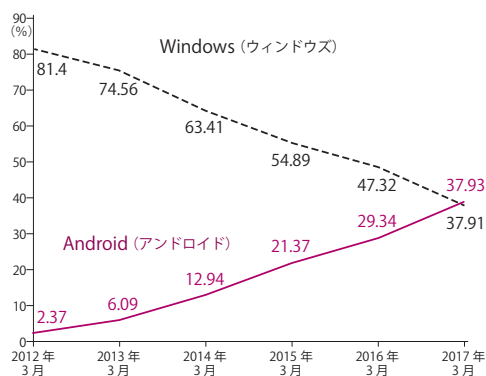
日本に携帯電話が登場したのが1987年である。その後の機能拡張はすさまじいが、2010年代のスマホ（スマートフォン）普及が決定的で、「ケータイ」はいまや万人のツールとなった。四六時中持つて回る小さなモバイル端末が、私たちの意識、感性をどう変えているのか、この機会にあらためて考えてみるべきだろう。

NTTが携帯電話サービスを開始したのは1987年4月だから、ケータイはちょうど30周年を迎えたことになる。そしていまケータイと言えば、スマホである。そのスマホが最近、世界レベルで、インターネットにアクセスする端末としてパソコンを上回った。

アンドロイドがウィンドウズを抜く

ウェブ分析の有力企業、スタットカウターの今年3月期の調査によれば、インターネットに接続している端末の基本ソフト（OS）オペレーティング・システム（シェア）で、グーグルのアンドロイド（Android）が37・93%、マイクロソフトのウィンドウズ（Windows）は37・91%と、アンドロイドがはじめてウィンドウズを凌駕した。

アンドロイドはスマホのOS、ウィンドウズはパソコンのOS。これは長年、インターネットにアクセスするプラットフォームとして君臨してきたパソコンが、ついにスマホにその場を譲ったことを意



Android、Windows 以外は、iOS（13.09%）、OS X（5.17%）など（2017年3月）

味する。「図」(*)は、差はわずかであり、比較したのがトラフィック（通信回線を利用するデータ量）で、実ユーザー数ではない点を考慮しなくてはならないが、図の年代別推移を見ると、スマホが急速に普及する一方でパソコン市場が縮小しつつある変化の激しさがよく分かる。

もともと地域別に見ると、アンドロイドのシェアが高いのはアジア、アフリカなどである。アメリカ、ヨーロッパなど先進国ではまだウィンドウズをはじめとするパソコンのシェアが高い。日本ではウィンドウズが全体の55%を占め、スマホではアンドロイドよりiOS（アイフォンのOS）のシェアのほうが高い。

大学生のパソコン離れに危機感

NECパーソナルコンピュータは3月、大学生向けのノートパソコンを売り出した。若者のパソコン需要を喚起するために、女子大生と共同開発したらしい。発売記者会見における社長説明によれば、「12歳から19歳の若者でパソコンを持っていない人が約7割いる。大学生くらいの年齢でも3割がパソコンを持っていない」。

もともと私が大学で教えていた10年以上前でも、大学生がパソコンを本格的に使い出すのは入学後だったから、その数値がそれほど変化したとは思えないが、肝心なのは、現在では、パソコンを使っていない若者もすでにスマホは使っているということである。

パソコンで初めてデジタル機器に接して、インターネットの使い方を学んだうえでケータイを使うのではなく、ケータイでインターネットに慣れ親しんだ若者が大学生になり、あらためてパソコンの使い方

やの・なおあき / 1966 年朝日新聞社入社。79 年出版局『アサヒグラフ』編集部員。88 年『ASAHI パソコン』初代編集長。『月刊 Asahi』編集長の後、95 年から出版局デジタル出版部長兼『DOORS』編集長。97 年総合研究センター主任研究員。2002 年朝日新聞社退社。同時にサイバーリテラシー研究所を開設。03 年 4 月から 06 年 3 月まで明治大学法学部客員教授。06 年 4 月から情報セキュリティ大学院大学客員教授。07 年 4 月から 12 年 3 月までサイバー大学 IT 総合学部教授。著書に『インターネット術語集』（岩波新書）『サイバーリテラシー概論』（知泉書館）『総メディア社会とジャーナリズム 新聞・出版・放送・通信・インターネット』（知泉書館、2009 年度大川出版賞受賞）など。最新刊『IT 社会事件簿』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）では、IT の進化により引き起こされたさまざまな事件事故の真相に迫っている。 右写真



【5 分間のサイバーリテラシー公開授業】 2014 年 1 月から、オンライン無料講座の仕組みを利用し、「サイバーリテラシー」に関する一コマ 5 分間の授業を公開中。「IT 社会を豊かに生きるために～社会編」は「サイバーリテラシーとは」「情報倫理について」「Web2.0 とは何だったか」など、『IT 社会事件簿』を読む～事件編は「遠隔操作ウィルスで誤認逮捕」「米政府による大規模諜報活動告発」「東日本大震災とソーシャルメディア」などのタイトルで公開中。サイバーリテラシー研究所のサイトからアクセスできる。

サイバーリテラシー研究所 <http://www.cyber-literacy.com/>

を習う。パソコンをとくに学ぶ機会がない人びとは、ほとんどパソコンには触れずにインターネットにアクセスする。

実は、今年 2 月パリに行ったとき、多くの大人がパソコンを持たず、インターネットアクセスもスマホですましているのを見て驚いたものだが、これが今後の趨勢になるだろう。

インターネット利用ばかりでなく、私たちの情報活動そのものが大きくスマホに依存することの意味は大きい。活字離れが言われて久しいが、いまでは情報端末はスマホだけ、若者たちは（そして大人も）、もはや本や雑誌を読む機会は減り、パソコンもいじらない。スマホだけでニュースを読み、買い物をし、友だちとコミュニケーションする。

以前、このコラムでもパソコンとスマホは別のメディアだということを書いたけれど、私は、紙→パソコン→ケータイというメディア変遷の歴史を振り返るとき、精神に対する影響という面では、紙からパソコンより、パソコンからケータイへの変化のほうが大きいと考えている。（＊２）本を読む行為を経てパソコンのデジタル画面を見ると、本というメディアをほとんど経ずにいきなりスマホをいじり、その延長上でパソコンをいじるのはまるで違うというべきである。

スマホ時代は何をもたらずか

パソコンの画面は大きく、雑誌や書籍を読むのと同じように、長い文章も読め



道具変われば見えるものも違う

イラスト kkkkkkkkkkkkeeeiii

る。パソコンというメディアはデジタルだが、文章を読むという点では、書物を読むのとあまり変わらなかった。ところがスマホの画面は小さい。ウェブを閲覧するブラウザもスマホ用により簡略化してデザインされているから、長い文章を読むには適しない。必然的に、人びとは長い文章を読み書くこと自体をしなくなりつつある。これは恐ろしい。

東京新聞のケータイ 30 年の特集記事（4 月 15 日付）で、自らは携帯電話を持っていないという作家の田中慎弥が「携帯を使うにしても、本は読んだ方がいい。

メールだとか SNS、LINE って、非常に短いセンテンスでコミュニケーションしなければいけないわけですが……短い言葉を養うためには長いセンテンスを吸収する必要があります」とケータイ時代だからこそ長い文章（の小説）を読むことを勧めている。続けて、「中高生が本を読まないという理由は一つで、周りの大人が読んでいないから。その頂点が政治家で、どう考えても本を読んでいない。彼らは言葉を全然知りません」とも。スマホ時代は私たちをどこへ連れていくのだろうか。

（＊２）2016 年 6 月号「メディアとしてのスマートフォン」。バックナンバーは以下の URL で見られる。
<http://www.cyber-literacy.com/blog/archives/2016/07/20166.html>